

# 『親の力』をまなびあう学習プログラム」を持続可能な取組としていくために ～ファシリテーターの果たす役割を中心に～

広島県立生涯学習センター  
主任 松田 愛子

## 1 はじめに

都市化による地域の人々のつながりの希薄化や、核家族化による親が身近な人から子育てを学ぶ機会の減少など、親や子どもをとりまく環境が大きく変化する中で、子育てや家庭の教育が困難な時代を迎えている。こうした社会問題を、学校や個々の親の問題とするだけでなく、地域や社会全体で子育てや家庭教育を支援していく環境を再構築していく必要性が高まっている。

そのような社会的背景をふまえ、広島県教育委員会では、「家庭教育支援」のツールとして、『親の力』をまなびあう学習プログラム（以下、「親プロ」と略記する）を開発・普及することにより、県内各市町において学びの輪を広げ、家庭教育支援の取組を進めているところである。

この「親プロ」実践の発展・普及の鍵を握るのが、参加型の学習プログラムの進行役を担う「親プロ」ファシリテーターと呼ばれる方々の存在である。平成 20 年度からの「親プロ」講座での実践の積み重ねにより、彼ら・彼女らの果たす役割とその成果は、少しずつ、発展・進化し、その「あり方」が形作られてきつつある。

本研究では、改めてその現状を整理し、ファシリテーターの果たす役割を中心に、「親プロ」を持続可能な取組としていくための方策と今後の展望を考察していく。

## 2 家庭教育支援をとりまく状況

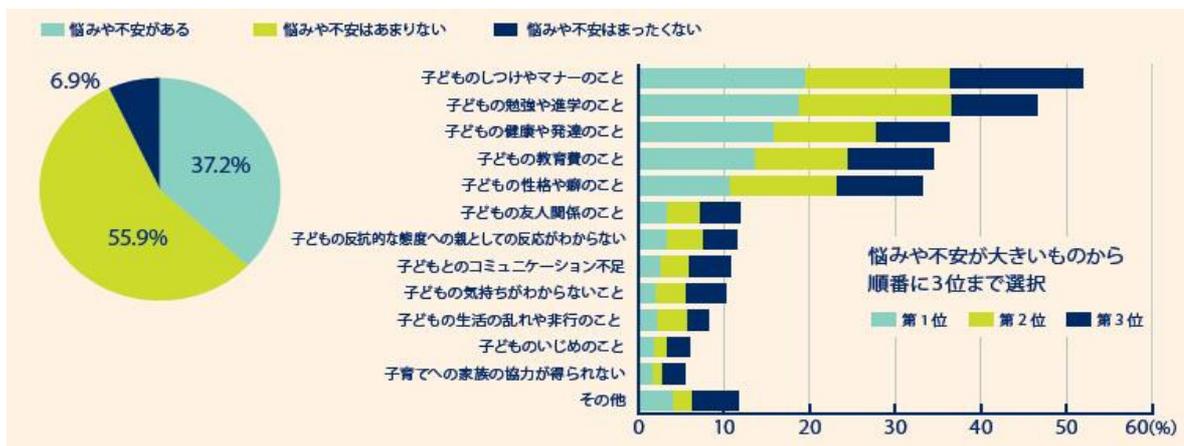
### (1) 家庭教育支援が必要とされる背景

#### ○今日の家庭教育の現状

家庭教育は、すべての教育の出発点であり、子どもが「生きる力」の資質や能力を身につけていく基礎をつくることから、子ども自身が持つ発達する力をサポートするような適切な家庭教育を受けることは、すべての子どもにとって重要であるといわれている。家庭教育は、親子という私的な関係を通じて行われるとみられがちであるが、同時に社会の形成者としての子どもを教育するという社会的な側面もある。このため、家庭教育を個々の家庭の努力のみに委ねることなく、担い手である親が学んでいくことを社会として支えていくことが必要であろう。親の親としての学びや育ちを応援することが、家庭教育支援の基本である。それでは、このような家庭教育支援が必要とされる背景、今日の家庭教育の現状については、どのようなものであろうか。

まず、自分の子育てについて悩みや不安があると答えた親が約4割にのぼるという調査結果が平成20年度に出されていることに注目したい。子育てについての悩みや不安は、一部の特殊なケースではなく、かなりの子育て家庭が抱えていることが分かる。また、最も大きい悩みや不安として、「子どものしつけやマナーのこと」があげられている。

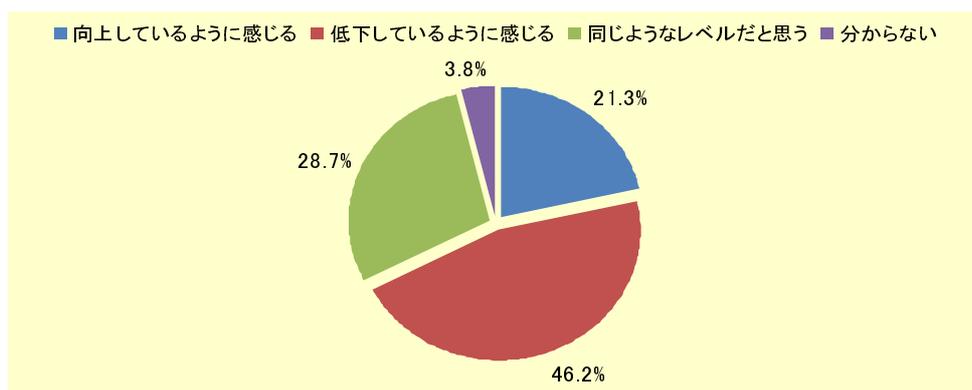
図表1：子育てについての悩みや不安



出典 文部科学省委託調査「家庭教育の活性化支援等に関する特別調査研究」(平成20年度)

また、広島県教育委員会が実施した平成23年度の教育モニターアンケートによると、自分が子どものときと比較した家庭の教育力について、約半数近くの方が、「低下している」と感じている。

図表2：自分が子どものときと比較した家庭の教育力



出典 広島県教育委員会「教育モニターアンケート」(平成23年度第2回)

地域における状況については、近所づきあいの程度について、平成19年(2007年)の調査では、「あまり行き来していない」及び「ほとんど行き来していない」「当てはまる人がいない」と60パーセント近くの方が答えており、7年前の調査結果に比べ10ポイント以上増加している。地域のつながりが希薄化していることが伺える。

**図表3：近所づきあいの程度**



出典 内閣府「国民生活選好度調査」(平成19年)

以前は、地域の中で、井戸端会議などを通じて近所の方に子育ての相談をしたり、子どもの世話を手伝ったりしてもらいながら、自然に「親」とはどうふるまうものなのか、親としての「知恵」を学ぶ環境が豊富にあった。けれども、昨今では、子育てに関する情報はたくさんあふれているけれども、それを周りの人に気軽に相談したり、話をしながら自分の気持ちや考えを整理していく場があまりない。「情報」はそのままでは、自らの「知恵」にはなっていくことはない。あふれる情報の中で自信を失い、地域の中で孤立している現在の「親」の状況があるようである。

このように、家庭教育をとりまく状況として、「家庭」では、「悩みを抱え孤立しがちな家庭など、様々な課題を抱えた家庭の状況」があり、社会全体では、「地域のつながりの希薄化など、地域全体で親子の学びや育ちを支える地域力の低下」があるといわれている。

ただし、別の調査結果では、例えば、「生活リズムのしつけをする保護者」の割合が、56.4%（平成15年）から70.7%（平成20年）に増加するなど、家庭教育に努力している傾向もある。（ベネッセ教育研究開発センター「子育て生活基本調査報告書（幼児版）」（平成21年度）による）「家庭生活に余裕がなく家庭教育を行うことが困難になっている家庭」と「様々な教育資源の情報収集や活用を図っている家庭」の二極化が伺われる。

また、「様々な教育資源の情報収集や活用を図っている家庭」でも、「子育てに力を注ぎ込むあまり、子育ての悩みや不安を抱えてしまったり、子どもに対して過剰な期待をしたり、子どもの主体性への配慮に欠ける関わりをしてしまう」という懸念が指摘されている。

教育について、豊富な情報や選択肢がある環境の中で、教育に関心のある親ほど、子育てに悩み、心理的に追い込まれている場合もあるようである。

### ○教育基本法の改正等

このような状況をふまえて、平成18年12月に改正された教育基本法第10条において「家庭教育」に関する独立規定が新設され、「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする。」と規定された。

また、同第 2 項では、「国及び地方公共団体は、家庭教育の自主性を尊重しつつ保護者に対する学習の機会及び情報の提供その他の家庭教育を支援するために必要な施策を講じるよう努めなければならない。」と規定している。さらに、第 13 条には家庭及び地域住民等の相互の連携・協力を新設し、「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力に努めるものとする。」と規定された。また、平成 20 年 7 月に閣議決定された教育振興基本計画においても、「家庭教育支援」が重点施策として位置付けられている。

## ○家庭教育支援の動き

一方で、このような背景のもと、親の親としての育ちや子育てを支援することを目的とし、(一般的には)親を対象として実施される、いわゆる「親学習プログラム」が注目されるようになってきている。講演や講義等のように、講師の話を参加者が一方的に聴いたり指導を受けたりする従来からある学習スタイルではなく、親自身の体験や気づきをもとに、親同士が交流しながら学びあっていく「親学習プログラム」は、主に海外で開発・実施され、平成 10 年代頃から、日本向けにアレンジする形で導入されている。「Nobody's Perfect プログラム(完璧な親なんていない)」(カナダ)、「Positive Parenting Program(トリプル P)」(オーストラリア)「STAR Parenting」(アメリカ)などがその一例である。NPO 等の支援団体や各自治体においてこれらの「親学習プログラム」が実施されるなど、「親の学び」を応援するための様々な取組が展開を見せている。

また、このような内外の動きを踏まえながら、府県レベル等での各自治体においても、主に生涯学習・社会教育担当課のような「家庭教育支援」施策を推進していく部局を中心として、前述の海外のプログラムや国内の先進事例等を参考にしながら、独自の親学習プログラム開発が進んでいるところである。

図表 4 : 各自治体による親学習プログラム

自治体名	タイトル	作成年度	対象
栃木県	親学習プログラム	平成 17, 18	すべての親, 中高生や若い世代
埼玉県	親の学習プログラム集	平成 19	すべての親, 中高生や若い世代
富山県	親を学び伝える学習プログラム	平成 18, 19, 22	すべての親, 中高生や若い世代
山梨県	やまなし「親」学習プログラム	平成 19	すべての親, 中高生や若い世代
愛知県	あいっこ「親の学び」学習プログラム	平成 22	すべての親
三重県	親なびワーク	平成 19	すべての親, 中高生や若い世代, 子育て支援者, 地域の方
滋賀県	家庭教育学習塾～語り合いを通じた親育ち～	平成 15, 20	すべての親
京都府	親のための応援塾	平成 19	小学校入学前の子どもの親
大阪府	『親』をまなぶ, 『親』をつたえる	平成 15, 16, 18, 19	すべての親, 小中高生
兵庫県	ひょうご親学習プログラム「ゆったりゆっくり親育ち」	平成 18, 22	すべての親, 中高生や若い世代
和歌山県	家庭教育学習資料「本音で, トーク!」	平成 16	幼児から小学生の親
鳥取県	とっとり子育て親育ちプログラム	平成 23	すべての親
島根県	親学プログラム	平成 23	すべての親
岡山県	親育ち応援学習プログラム	平成 22	すべての親, 中高生や若い世代, 子育て支援者, 地域の方

広島県	「親の力」をまなびあう学習プログラム	平成 19	すべての親, 中高生や若い世代, 子育て支援者, 地域の方
香川県	親同士の学びを取り入れたワークショップ学習プログラム集	平成 20, 23	すべての親
熊本県	「親の学び」プログラム	平成 21, 22, 23	すべての親, 中高生
大分県	おおいた「親学のすすめ」読本	平成 19	すべての親, 中高生
京都市	子どもを共に育む『親支援』プログラム ほっこり子育てひろば	平成 22	すべての親

各自治体 HP 等を参考に筆者作成（調査中）

## （２）広島県の家庭教育支援の特徴

広島県教育委員会においても、「家庭教育支援」の取組として、親の育ちを応援する学びの機会の充実を目指し、親が自信を持って子育てに取り組むことができるよう、『親の力』をまなびあう学習プログラム」を平成 19 年に開発し、以降、一部改善を加えながら、県内に普及・展開しているところである。

広島県の「親プロ」の特徴は、参加者同士が「寄って」「話して」子育てを振り返り学びあい共感を深める中で、親が「自ら気づき」「自ら学べる」力を生み出すこと、そして、出会いをきっかけに親同士のネットワークをつなげていくことを“ねらい”としていることであろう。また、子育て中の親だけでなく、中学生・高校生等のこれから「親」になる世代や妊娠期の方から、子育てを終了した中高年世代の方まで、幅広い対象の方が「子育て」について学ぶことができるのも大きな特色である。

いわゆる「参加型学習方法」を採用しているこのプログラムは、参加者同士が話し合い、知恵を出し合い、お互いに学び合う、参加者が「学びの主体」となるスタイルを進めることを基本としている。

そして、この「親プロ」実践の発展・普及の鍵を握るのが、参加型学習の進行役を担う「親プロ」ファシリテーターと呼ばれる方々の存在である。彼ら・彼女らの活動についても、広島県オリジナルの展開が広がっている。第 4 章で詳しく述べることとする。

## 3 「『親の力』をまなびあう学習プログラム」の概要と事業経過

### （１）平成 18・19 年度の取組

文部科学省委託事業「家庭教育支援総合推進事業」を活用し、「親の教育力を高めるプログラム開発検討委員会」において、プログラム開発を行った。「『親の力』とは子どもに対して第一義的責任を果たす力と社会の一員として子どもを育成する力が一体となった“子育て力”＝人を育てようとする人なら誰もが持っているであろう“親心”から発せられる力」（親プロ『学習のすすめ方』巻頭言より）であるという共通認識のもと、子育て中の親だけでなく、中学生・高校生等のこれから親になる世代や妊娠期の方、子育てを終了した中高年世代を含む幅広い方を対象とした、「子育て段階」に応じた 24 のプログラムを開発し、学習機会提供のスタート地点に立った。

図表5：「親の力」をまなびあう学習プログラム」一覧

「親の力」をまなびあう学習プログラム ～寄って、話して、自ら気づく～ (平成23年度改訂版)  
 全体のねらい<自他の子育てを振り返り学び合うなかで、親が「自ら気づき」「自らまなべる」力を高める。>

段階<ねらい>	対象<ねらい>	教材番号	教材のタイトル<ねらい>
<p>「自分の親は将来の自分」期 (子育て準備期)</p> <p>&lt;自分の親子関係を振り返ったり、親と自分を想像することで、これからの自分の生き方を考える。&gt;</p>	<p>「親はウルサイけどアリガトウ」編 (中・高校生などの青少年対象)</p> <p>&lt;親の立場を想像し、これからの自分を振り返り、親と向き合おう。&gt;</p>	1	おぎゃーってスゴイ！～生まれてきた自分、やがて生まれてくる命～ <卵を自分の子どもに見立て、命の大切さと、親として命に関わることの責任の重さを実感する。>
		2	親しらず 子しらず～親子関係を振り返る～ <自分の親子関係を振り返り、親の役割や気持ちについて考える。>
		3	おや！ おや？～自分のあゆみと親のかかわり～ <「自分史」を作るなかで親との関係を振り返り、将来どんな親になりたいかを考える。>
		4	親になるって！？～命を授かる責任と喜び～ <子どものいる生活を想像し、親になる心構えを持つ。>
		5	妊娠期のカラダとココロ～パートナーの理解と協力～ <妊娠期の女性の体と心の変化を理解し、男女の相互理解と支え合いの大切さを考える。>
		6	出産は初めの一步！～思い描こう、赤ちゃんのいる生活～ <これから始まる子育てで生活への心構えや態勢づくりについて考える。>
<p>「過ぎてしまえば一番幸せ」期 (子育て前期)</p> <p>&lt;子どもがいる生活を受け入れるとともに、子どもの成長の程を余裕を持って楽しみ、子どもをしっかりとして受けとめる。&gt;</p>	<p>「へトへトでもニッコリ」編 (0～2歳児の親対象)</p> <p>&lt;命を守る責任を自分自身に負わせ、育児の自信を持つ。&gt;</p>	7	私の時間、子どもの時間～つくってますか？心のゆとり～ <多忙な育児のなかで心にゆとりを持てるよう、上手な時間の使い方について考える。>
		8	お付き合いって難しい？！～「私と周り」の人間関係を考える～ <自分と周囲の人間との関係を良好にすることについて考える。>
		9	ワイワイ、キャーキャー！！～「子どもと遊び」について考える～ <情報や意見を交流し、子どもを豊かに育む遊びについて考える。>
		10	買って買って！！～さあ困った！あなたなら～ <子どもの気持ちを受けとめる親の役割の大きさについて考える。>
		11	〇〇ちゃんがするっ！！～自我の芽生えと親の思い～ <子どもの思いに寄り添い、自主性を伸ばすために、親がどう支援すれば良いかを考える。>
		12	もうすぐ小学生！～これまでの子育てを振り返る～ <これまでの子育てを振り返り、これからの育て方を考える。>
		13	親子でやってみよう！～楽しい小学校生活を過ごすために～ <子どもが新しい環境に慣れ、小学校生活を楽しく過ごすために、親子で取り組めることについて考える。>
<p>「親子で登る自立の坂道」期 (子育て後期)</p> <p>&lt;子どもの成長を見守り、受け入れるなかで、親も共に成長しようとする姿勢を持つ。&gt;</p>	<p>「ワクワク・ドキドキ」編 (小学～年生の親対象)</p> <p>&lt;子どもを多様な価値観で受けとめ、自ら伸びようとする芽を育て、成長を支援する。&gt;</p>	14	くらべないで！～同じ子どもなんて一人もいない～ <他の子どもと比べることの功罪を考え、自分の子が持つかけがえのない価値を再認識する。>
		15	みなおして！～多様な視点から子どもを見る～ <多様な視点から見ることにより、心に余裕が生まれることに気づく。>
		16	体と心の変化～子どもの思い、親の戸惑い～ <子どもの成長に戸惑う自分自身をみつめなおし、自立しようとする子どもの気持ちと理解し支えることについて考える。>
		17	どうする？ どういう？～子どもの人間関係へかかわり～ <子どもの交友関係への親の適切なかかわり方について考える。>
		18	さあ、どっち！？～信じる、見守る、待つ、聞く～ <反抗期等多感な時期の子どもとの接し方から、親子より良いコミュニケーションの取り方について考える。>
<p>「再び子育て、そして親育て」期 (子育て支援期)</p> <p>&lt;自分の体験をもと</p>	<p>「親が子離れできない」編 (中高生などの子育て支援対象)</p> <p>&lt;子どもが自立しようとすることを受け入れ、支援するとともに、親自身の子離れについて考える。&gt;</p>	19	思い出してみよう…～私にもあった青春時代～ <自分の青春時代を思い出し、子どもの思いに寄り添いつつ言葉が届ける術を考える。>
		20	キャッチボールは得意ですか？～気持ちをつたえる 胸の真ん中でうけとめる～ <進路選択を巡る親子のロールプレイをとおして、子どもと気持ちを通じ合うことの難しさと大切さを学ぶ。>
		21	ほどよい距離感って？～子どもの自立と親の自立～ <子どもの自立を適切に支援できるような、親の接し方について考える。>
<p>「再び子育て、そして親育て」期 (子育て支援期)</p> <p>&lt;自分の体験をもと</p>	<p>「『いまどきの親は』なんて言わない」編 (中高生などの子育て支援対象)</p> <p>&lt;現代の子育て環境の状況を学びつつ、若い親の子育</p>	22	よりそってみよう…～子育て環境の変化を知る～ <子育て環境の時代変化を知り、現代における子育て支援について考える。>
		23	たちどまってみよう…～こんな場面で、あなたなら？～ <子育て中の親子へのわりについて意見交換し、適切な支援のあり方について考える。>

に若い親たちを支援しつつ、共に学ぶ意欲を持つ。>	てを支援する。>	24	かかわってみて…～地域の大人ができること～ <子どもの豊かな成長を促す場をつくるために、地域の大人として何が出来るかを考える。>
--------------------------	----------	----	---------------------------------------------------------------------

【新規開発教材】 多様化する現代的課題に対応した新規開発教材

対象	教材番号	教材のタイトル<ねらい>
乳幼児～高校生の父親	25	お父さんの子育てトーク！～「父親」の楽しみを持ち寄ろう～ <父親として子育てにかかわることの楽しさを語り合い、自分なりにできることを考える。>
小学生～高校生の親	26	ケータイ！うちではどうする?!～考えてみて、わが家流のつきあい方～ <子どもの携帯電話利用実態について話し合い、どうすれば子どもが携帯電話と上手に付き合うことができるかを考える。>

## (2) 平成 20～22 年度の取組

単県事業「家庭教育応援プロジェクト事業」として、プログラムの普及を開始し、「(出前)講座の実施」「ファシリテーター養成講座の開催」「市町ごとのファシリテーター交流会の開催」等を行った。下の図表は、この事業での講座の実施数の年度ごとの目標値と実績を示したものである。講座数全体を増やしていくとともに、県支援による出前講座数を少なくして、養成したファシリテーターによる講座を増やしていくことを大きな目標として取り組んできた。当初は、「県支援」という形で県の社会教育主事等が「(出前)講座」を行ったが、3年間に、県内 23 の全ての市町に、約 300 人の“「親プロ」ファシリテーター”が誕生し、各地域での「親プロ」ファシリテーターによる「親プロ」活動が、草の根的に広がっていった。幼稚園・保育所・小学校・中学校の保護者懇談会・PTA研修会、公民館の家庭教育講座、子育て支援センター、子育てサークル・サロンなど、様々な場面で「親プロ」が活用された。参加者からは、「悩んでいるのは私だけではないのだと気持ち楽になった」「自分の子育てを客観的に見つめることができた」「元気をもらった」といった感想が出され、講座実施後のアンケート結果(平成 20～22 年度実施分集計)によると、7 割を超える参加者が子育ての不安が軽くなったと感じている。

図表 6 : 事業の経過 (平成 20～22 年度)



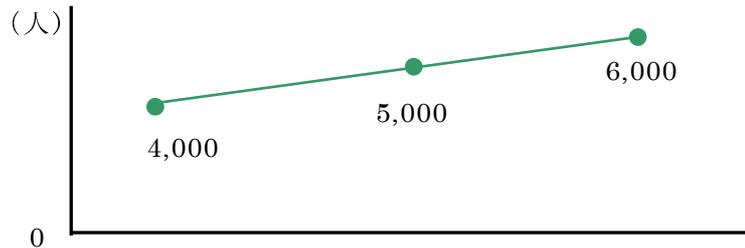
### (3) 平成 23～25 年度の取組

単県事業「家庭教育支援事業」として、プログラムの更なる普及を図るため、事業の主なあり方を、市町における取組への支援にシフトしている。市町における講座実施への支援（情報提供、ファシリテーター派遣、全県的広報等）、市町が主催するファシリテーター養成講座開催への支援（指導・助言、講師等）、ファシリテーターの資質向上と情報交流のための「ステップアップ研修」の開催等を中心に、事業を展開しているところである。

また、より多くの方に学習機会を提供するための新たな講座実施の場の開拓として、これまで主に講座が実施されてきた場に加え、企業研修、小学校の入学説明会、高校（高校生）、大学（大学生）、親子の集まるイベント会場、（商業施設内の）県子育てサポートステーション、民生・児童委員研修等でも講座を実施、さらに、多様化する現代的課題に対応するため、平成 23 年度に、「父親の子育て」と「携帯電話」をテーマとした新しい教材を開発し、続く平成 24 年度は「仕事と子育ての調和（ワーク・ライフ・バランス）」をテーマとした教材を新たに開発中である。

**図表 7：事業の経過（平成 23～25 年度）**

【参加者数の目標値】



【実績】

項目		23年度	24年度 (予定含む)	25年度	20～24年度計
講座数	県支援	16件	35件		197件
	ファシリテーター	160件	193件		606件
	計	176件	228件		803件
参加者数		4,235人	5,084人		18,018人
ファシリテーター養成数	県	—	—		168人
	市町	74人	132人		334人
	計	74人	132人		502人

## 4 「『親の力』をまなびあう学習プログラム」ファシリテーターの概要

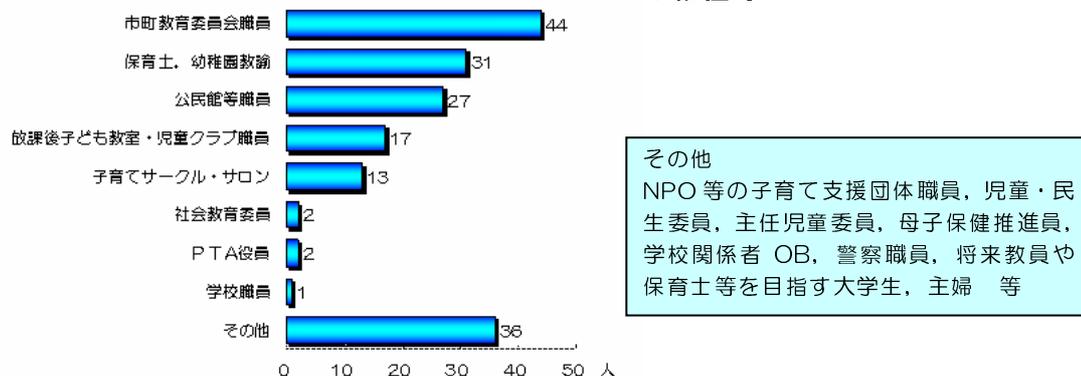
### (1) ファシリテーターの属性

図表 8 は、「親プロ」ファシリテーター養成講座修了者の職種等の内訳をあらわしたものである。最も多いのが、市町教育委員会職員、ついで、子育て支援センターや保育所・幼稚園等の職員（保育士・幼稚園教諭）、公民館等の社会教育施設職員となっている。家庭教

育支援を担う行政関係者や公民館等職員がファシリテーター養成講座を修了することにより、職員自身が、直接「親プロ」講座の進行を担えるだけでなく、参加型の学習手法を他の事業に応用したり、各市町において、養成された「民間・地域住民」のファシリテーターの活動への支援の充実をより図ったりすることが可能となる。また、子育て支援センターや保育所・幼稚園等といった、子育て支援の現場の第一線に立つ方々が、「親プロ」の輪に入っていることも、特に子育て不安の高い乳幼児期の親への支援にたいへん効果的であると考えられる。文部科学省の報告書においても、「幼稚園・保育所等や小学校には、子どもの様々なエピソードについての情報が蓄積されています。学級懇談会等で、親たちが、教員・保育士を交えて語り合うことは、子どもの個性を理解し、発達段階や子どもの特性に応じた親のかかわり方を理解することに役立ちます」（引用文献① 16頁）と述べられている。

このほかにも、NPO等の子育て支援団体職員、児童・民生委員、主任児童委員、母子保健推進員、学校関係者OB、警察職員、主婦、将来教員や保育士等をめざす大学生など、地域の様々な方々が、「親プロ」ファシリテーターとして養成されている。ここに紹介したデータは、主に県が養成したファシリテーターを中心に、平成22年度中に調査・集計したものである。市町にファシリテーター養成の主体を移し、ファシリテーター数も倍増している平成24年度現在においては、地域の多様な人材を巻き込みながら、地域に根付いた「地域の住民力」を活かした活動がさらに進んでいると考えられる。

**図表8：「親プロ」ファシリテーター養成講座修了者の職種等**



【参考】平成22年度「第1回学習プログラム検討委員会」会議資料

次に、養成講座修了者のうち、実際に「親プロ」ファシリテーター活動をどれくらいの人が行っているかについて検証する。平成23年度活動状況の集計によると、平成20年度から23年度修了者367人のうち、平成23年度の1年間に実際に「親プロ」ファシリテーターとしての活動を行った人は84人であった。養成講座を修了したおよそ4人に1人が、「親プロ」ファシリテーターとしての活動を継続していることになる。活動状況調査やファシリテーター交流会で出された声によると、活動ができない理由としては「自信がない」「日程の都合が合わない・多忙」「勤務先の異動（家庭教育・子育て支援関係以外の部署へ

異動)」「仕事や生活の資質向上のために講座を受講」「思っていた活動と相違」等が主な理由となっている。また、「親プロ」ファシリテーターの活動を行っている人と県が主催する「親プロ」ファシリテーターステップアップ研修に参加する人が、ほぼ同数で推移していることも注目される。(研修参加者：平成 23 年度 79 人，平成 24 年度 115 人)活動を続けていくためには，継続的な学びや仲間との交流の機会が必要であることが分かる。

## (2) ファシリテーターの果たす役割

一般的に，ファシリテーター(英: Facilitator)は，「支援し促進する人」という意味合いを持ち，「ことを容易にする，楽にする，促進する」という意味の動詞，ファシリテーション(英: Facilitation)に由来している。(Facili はラテン語で easy を意味する。)ファシリテーターは，人々の活動が容易にできるように支援し，うまくことが運ぶように舵取りをする役割を持つ人であるともいえる。『ファシリテーション 実践から学ぶスキルとところ』では，「ファシリテーション」を「人々の参加を促進し，対話を育み，学びや創造を容易にする技法」であると述べている。

この「ファシリテーター」という役割は，様々な問題が複雑に絡み合い，価値観が多様化する現代社会のなかで，一つの目標や目的にむかって集団をリードしていく「先導者・指導者」役を担う「リーダー」に代わり，近年注目されるようになっており，環境，まちづくり，子育てなどに取り組む市民活動をはじめ，学校教育，社会教育，企業の会議や研修など，様々な現場で広がりを見せている。

「親プロ」進行の手引書である「学習のすすめ方」には，「親プロ」ファシリテーターの役割として次の6つの視点をもとに説明している。①学習者の「自ら気づきまなぶ力」を引き出しましょう，②語り上手ではなく，聞き上手になりましょう，③力の均衡(パワーバランス)を大切にしましょう，④コーディネーターでもあります，⑤深刻な問題は関係機関を紹介しましょう，⑥いろいろな人の存在を意識しましょう。

「親プロ」ファシリテーターは，この「学習のすすめ方」を，「養成講座」受講時に手渡され，これらの役割が自らに期待されていることを踏まえて活動を開始する。しかしまたその一方で，実践の積み重ねにより，「親プロ」ファシリテーターの果たす役割は，「学習のすすめ方」で示された視点にとどまらず，少しずつ発展・進化し，これからの「あり方」が形作られてきつつある。

現在形作られつつあり，また，これからさらに期待される「親プロ」ファシリテーターの果たす役割として次の3つの視点から考察していきたい。

### ○「親プロ」ファシリテーターへの期待①

草の根活動を広げ，地域の教育力を高める地域の「キーパーソン」として

地域の中には，民生・児童委員，主任児童委員をはじめ，登下校時等の安全見守り隊，

読み聞かせボランティア、託児ボランティア、青少年健全育成指導者、放課後子どもプラン関係者など、子どもや子育て家庭を支援する様々な担い手があり、それぞれの現場で活躍されている。これらの方々が、「親プロ」活動の輪に入れつつあることは、前項でも述べたが、「親プロ」ファシリテーターには、親子の育ちを応援するそれらの「支援者」の使命や持ち味を活かしながら連携・協力し、地域の家庭教育支援の深化を図っていく「キーパーソン」（重要な人）として活躍していくことが期待される。

市町によって違いはあるが、基本的に、「基礎講座」「応用講座」で構成されるわずか二日間の「養成講座」を修了して養成されたファシリテーターたちは、決して子育てや家庭教育の「専門家（スペシャリスト）」といえる方々ばかりではない。ただ、決して「スペシャリスト」ではないが、地域のことなら何でも知っている近所の「おじさん」「おばさん」、地域で温かく子育てを見守る「おとな」たちを巻き込んで、「親プロ」を通じた親子の育ちを応援していこうという営みが、地域に根付いた草の根の活動となり、地域全体の教育力向上へとつながっていくものと考えられる。草の根活動を広げ、地域の教育力を高める地域の「キーパーソン」として、「親プロ」ファシリテーターは、活動の歩みを進めている。

## ○「親プロ」ファシリテーターへの期待②

### 多様な「親の力」を結び付ける「コーディネーター」として

子育てを一人で背負い込む“弧”育てが問題視される今日、子育て家庭に必要なのは人と人とのつながりである。人は誰かとつながっていかなくては生きてはいけない。親も子ども地域や社会の中で、他者と関わりあいながら育っていく必要がある。しかし、地域のつながりが希薄化する現状のもと、初めて親となり、新しい人間関係がうまれる中で、親自らの力で新しい他者との関係を築いていくことは、非常に困難なことであるともいえる。地域のなかに、子育ての悩みについて本音で語りあったり、気軽に相談したり、お互いに支援し合えるネットワーク（仲間づくり）を形成することが求められる。そのためには、親自身がその輪のなかに一歩踏み出す勇気と、それを支える体制とが両輪となって動き出す必要がある。その両輪のつなぎ役、調整役を期待されるのが、「親プロ」ファシリテーターの役割の一つであるといえる。「親」と「親」をつなぐ、「親」と「学び」をつなぐ「親プロ」活動の継続のなかで、孤立化した家庭を開き、地域とのつながりが作られている。

初めは緊張した面持ちであった「親プロ」参加者も、講座終了時には、「もう一度あの人に会いたい」「またこの場に来たい」という感想を残す。見知らぬ者同士だった参加者が、笑顔で一緒に会場を後にしたり、互いの連絡先を交換して分かれたりする場面もよく見られる。「人から元気をもったり、人に元気をあげたり、支えあって育ちあうことが大人になっても大切」と語るファシリテーターもいる。多様な「親の力」を結び付ける「つなぎ役」（コーディネーター）の役割を「親プロ」ファシリテーターが担っている。

### ○「親プロ」ファシリテーターへの期待③

#### 心に寄添い、励ます「メンター」として

平成 24 年度の「親プロ」ファシリテーターステップアップ研修（第 4 回）の会場において、広島県立生涯学習センターの志々田生涯学習推進マネージャーは、「サブファシリテーターの役割」として次のような説明を行っている。「『親プロ』のサブファシリテーターには『メンター』としての役割を特に重視してもらいたいと思っています。『メンター』とは、『メンタル』、つまり『心情』に寄り添う人のことを言います。参加者の中には、自分の意見に自信がもてなかったり、人前で話すことに緊張を感じている人も少なくありません。そのような場合、参加者の傍に座って『ふんふん』や『へ～おもしろいね』などと合いの手や、



「親プロ」講座（福山市）

励まし・ほめる言葉を入れたり、大きくうなずいてあげる人を配置することで、参加者が安心し、どんどん話したくなるような雰囲気をつくることができます。これが『メンター』の役割の一つです。サブファシリテーターが『メンター』の役割を果たすことによって、参加者は、自分の話を興味をもって聞いてくれているという安心感のもと、自分の気持ちを開放し、講座への参加をより楽しむことができるようになります。」（研修資料より引用）

子育てに不安や自身のなさを抱える親の思いの根底には、「子どもの成長は、自分の子育てのやり方にかかっている」とか「失敗は許されない」といった切迫とした感情があることが多い。また、まじめで一生懸命な親ほど、周りからの叱咤激励を真剣に受け止め、「もっとがんばらなくては」と思いつめてしまうことも少なくないであろう。真面目、几帳面、責任感が強いといったその人の持っている「良さ」は、学校や仕事などの場面ではたいへんに役立つが、「完璧にはいかない」子育てにおいては、逆に親子を苦しめることにつながっていくこともある。また、子育てに奮闘している親に対して、周囲が励まそうとしてアドバイスすればするほど、親自身の負担となっているケースというのは、地域や親戚間での交流の中などでよく見られる光景ともいえる。

文部科学省・中央教育審議会生涯学習分科会長等を務める大日向雅美教授は、その著作のなかで、「子育てを支援する人からのプレッシャー」として、「支援する側の考えは一様ではありません。『親のわがままではないのか』『もっと母親がしっかりすればいいのに』という思いを持つ人も少なからずいます。（略）出口のみえないトンネルをさまよう心境の母親に寄添って、ともに歩くような支援を（略）」（引用文献⑧96－97頁）と述べている。

「親プロ」講座の現場では、複数のファシリテーターで役割分担して「サブ」を担当する場合や、逆に複数のグループを構成しない少人数の場合に、ファシリテーターは、親同士で意見を交流するグループの中に直接入って支援を行っていくこととなる。そして、親の気持ちに寄り添い、悩みや本音を引き出しながら、ファシリテーター自身が感じたことをフィードバックし、時には自身の子育て経験から気づいたことをアドバイスしていくこと

もある。参加者の親のなかには、「正しい答えを発言しなくては」と構えたり、「本音を語るのは苦手」と心を閉ざしがちな方もいる。ファシリテーターは、そういった参加者の緊張をときほぐしながら、メンバー間の安全と信頼の関係を醸成していく。「私一人だけが悩んでいるのではないと安心した」「話をきいてもらえて気持ちが楽になった」という感想を持たれる参加者は多い。「答えを求めるのではなく、親の気持ちを楽にできる架け橋の役割ができれば」と語るファシリテーターもいる。子育てに不安や自信のなさを抱える親の気持ちに寄り添い、見守り、親自身の成長する力を信じて、共感を持って励ましていく「メンター」としての存在は、「親プロ」ファシリテーターに期待される大きな役割の一つである。

## 5 持続可能な取組のためのシステムづくりに向けて

### (1) 地方自治体と行政職員の果たす役割

地域の実情により、家庭教育に関する課題も様々であり、求められる具体的な家庭教育支援の内容も地域によって異なってくる。各地域の実情に応じた具体的な家庭教育支援の取組を、各自治体が、それぞれの家庭教育支援に係る施策や教育計画のもと、責任をもって進めていくことが、「親プロ」の取組を持続可能なものとしていくためにも重要である。また、縦割行政の壁や垣根を越えた連携や、企業、NPO等の行政以外の組織・団体との連携・協働の視点も不可欠である。

「親プロ」の取組における、市町、県及びそれぞれの行政職員の果たすべき役割について考察を進めることとしたい。市町及び県においては、次の観点から取組を進めていくことが期待されると考える。

#### ○市町の役割

市町においては、住民の最も身近な行政機関として、家庭や地域の具体的なニーズを的確に反映し、それに応じた家庭教育支援を日常的に実施するとともに、家庭教育支援に関わる地域の様々な関係者・機関の取組をコーディネートする中心的な役割を担うことが期待される。具体的には、「親プロ」講座の企画・実施をはじめ、ファシリテーターの養成、養成に必要な地域人材の発掘と活動のコーディネート(地域の多様な力の結集)、地域住民、NPO、学校、公民館、専門機関、企業等の地域の様々な関係者との連携・調整、ファシリテーターの組織化と運営のサポート、さらには、調整や合意形成を図る場としての協議会や委員会等の組織化・運営等により取組を進めていくことが必要となると考えられる。

#### ○県の役割

県においては、広域的な観点から、地域の家庭教育支援の取組を活性化するため仕組みを整備していくことが期待される。具体的には、「親プロ」の取組を検討するための委員会の

組織化，組織化した委員会による「新たな地域課題に対応する支援の手法やプログラムの開発・改善」，新しい「場」の開拓，取組事例の収集・検証等を行うとともに，広域的な関係者のネットワーク構築を促進していく必要がある。また，広域的な観点や地域間の取組みの格差是正の観点から，市町や地域の様々な主体に対し，情報提供や助言，その他必要な支援を行っていくことが求められている。

さらに，市町におけるファシリテーター養成への支援，養成したファシリテーターの資質向上と情報交流のための研修機会の提供など，「親プロ」の取組みが，ファシリテーターによる自律的かつ持続的な取組となるよう環境の整備を図るとともに，各地域のモデル的な取組の普及啓発やそのための情報提供など，広域的な観点から施策を進めていく必要があるだろう。

## （２）ファシリテーターのネットワークと学びあい

「親プロ」活動をしながらぶつかるファシリテーターの悩みや疑問を乗り越えるための知恵や力は，同じ仲間同士の学びあいと交流を通して育まれる。また，ファシリテーター自身が学びのなかで成長していこうという姿勢が，親である参加者への支援を促進し，参加者の学びを深めていくということもいえる。「親プロ」活動を継続・充実させていくためには，ファシリテーター自身の学びと交流によるスキルアップや「ともに活動を行っていく」という仲間との信頼関係づくりが不可欠である。

現在，市町レベルにおいては，福山市，府中市，三次市，庄原市等，多くの市町で，これからの「講座」の打合せや情報交換を行うためにファシリテーター仲間が定期的集まったり，市町主催によりファシリテーターを対象とした「研修会」「交流会」を実施したりするなど，ファシリテーターのネットワーク化が進められている。

特に，ファシリテーターグループによる主体的な活動が継続されている尾道市や世羅町の事例は，県内においても，先進的な取組であるといえる。



すまいるぱれっと「定例会」（尾道市）

尾道市の「すまいるぱれっと」では，市教育委員会がその活動を支援して，広報活動や定期的な会議を開催するなど，非常に主体的で積極的な活動が行われている。県教育委員会が提供している既存のワークシートを応用して，参加者にもっと身近なテーマをもとにした学習の場となるようにオリジナルのワークシート（「尾道プログラム」）を作成するなど，地域課題に対応した発展的な活動も行われている。講座を実施するにあたり，メインファシリテーター（進行役）とサブファシリテーター（アイスブレイク）の２人で講座を展開していくことを基本に，他のメンバーもできる限り講座に参加し，参加者の状況や場の雰囲気によっていつでもフォローできる体制をつくるなど臨機応変な対応ができるのもこのグループの特長である。

世羅町の「Pくらぶせら」では、同じく町教育委員会の支援のもと、町独自のファシリテーター養成講座を開催するなど、町の家庭教育支援チームとしての活動が行われている。依頼された「講座」にファシリテーターとして出向くだけでなく、「父親の子育て」をテーマとした講座を開催するなど、地域における家庭教育に関する課題に応じた講座を企画し、主体的で地域に根ざした活動となっている。



Pくらぶせら主催  
「おとうさんの子育てトーク」(世羅郡世羅町)

一方、県域においても、県が主催する「ファシリテーターステップアップ研修」等での出会いと情報交流を通して、ファシリテーターの緩やかな県域のネットワークが広がりを見せている。尾道市等の県内の先進地域のファシリテーターの会合に、他市のファシリテーターが合流したり、互いの活動を見学・支援しあうなど、市域を超えたファシリテーター同士の直接的な交流も進んでいる。

多くの市町で取り組まれているメインファシリテーター・サブファシリテーターの役割分担のあり方も、広島県版「親プロ」の特長である。「基礎講座」「応用講座」で構成されるわずか2日間の「養成講座」を修了したファシリテーターが、いきなりその活動の表舞台にたち、一人で進行役を務めることは、いわゆる「スペシャリスト」ではないファシリテーターにとって、非常に困難なことである。養成講座後のアンケートによる今後の活動意向調査でも、多くの修了者が、「活動してみたいが自信がない」「手伝いや見学から始めたい」と回答している。また、100人レベルの多人数が参加する「講座」の際には、進行役を一人で務めることは、全体の進行管理が事実上困難なことも多い。

“一人では困難でも、仲間とならやれる”…メイン・サブの役割分担というその活動のスタイルは、「親プロ」講座のスムーズな進行の一助となるだけでなく、ファシリテーター仲間の信頼関係のあり方そのものが、「講座」に参加する若い親たちにとって、「私もこうありたい」「こんな仲間を作りたい」という、人と人の信頼関係づくりのロールモデルをイメージさせるものともなっている。

安芸郡府中町では、「親プロ」ファシリテーターでもある「子育て支援センター」等の職員が、「親プロ」講座中の託児を担当したり、講座の発展として「手作りおもちゃの紹介を行ったりするなど、ファシリテーター間での柔軟な役割分担も行われている。多様な力を持つファシリテーター同士が、互いの「得意なこと」を持ち寄って活動を発展させていく好事例であろう。



ステップアップ研修(安芸郡府中町)

以上のように、市域・県域でのファシリテーター同士のネットワークによる学びあい・支えあいが、「親プロ」活動を持続可能な取組としていくためには不可欠であるといえる。

## 6 おわりに

様々な課題が絡み合い、混沌とした社会の中で「親子の育ち」を応援していくためには、応援する「ファシリテーター」自身も、またその活動を支える「行政」主体も、「育ち続けていく」必要がある。おわりとして、多様な力を結集させ、学びあい、育ちあうための新たな方策を展望し、10年後に目指される姿を次の3つの視点から描いてみたい。

### (1) 子育てを「支援される側」から「支援する側」へ

子育て中の「親」が、子育て支援の受身としてあるだけでなく、「親プロ」を通じた学びやつながりのなかでエンパワメントしあい、子育てを支援する次世代の「力」へ成長していく姿が目指される。そのためには、親が自ら主体的に課題解決をしていくことができるような学びの機会が確保されるとともに、学びと支援が好循環する仕組みが構築されていることが必要である。

「親プロ」ファシリテーターの果たす役割も、一本的に「してあげる支援」だけでなく、親自身が本来持っている力を信じ、寄り添い、励ますことにより、親が親自身の力で育っていくための「力を引き出す支援」が求められる。



三ツ城コミュニティハウス（東広島市）

東広島市では、学校内に併設されている公民館施設の社会教育指導員が、「支援者」となり、「親プロ」講座に参加した小学校保護者の有志グループが、「親プロ」のよさをもっと多くの親に広げていきたいという思いで、「親プロ」ファシリテーターとしての活動を開始している。「支援される側」から「支援する側」へ、次世代の支援者を育てるための「学びと支援が好循環する」モデルの一例といえる。



ファシリテーター養成講座（呉市）

ファシリテーターの「養成講座」において、活動中の

“先輩”ファシリテーターが、「講座」の運営に関わり、研修を支援するというシステムを構築していることも、ファシリテーターのネットワーク化や次世代の「支援者」の養成に有効である。「いろいろな人との出会いがあり、気づきや励ましを与えられた」「〇〇さんを目指して頑張りたい」といった感想に代表されるように、養成講座の

参加者は、先輩ファシリテーターやともに講座を受講した仲間との出会いをもとに、活動への意欲を高めていく。

そして、“先輩”ファシリテーターが、これまでのファシリテーター自身の経験やアイデアをもとに、新しい仲間へ「こうすればもっとうまくいくよ」「こういったところがとてもよかったよ」とアドバイスしたり、「私も初めは不安だった。でも大丈夫」「最初から

上手にはできないよ」「一緒にやってみましょう」というエールを送ることにより、ファシリテーター同士のつながりや連帯感を生み出し、実践から生み出されたファシリテーターの“知恵”を次世代の支援者につないでいくことを可能としている。

## (2)「親プロ」の限界を超えて

「親プロ」の取組のなかで、ファシリテーターからよく出されるのが、「本当に困っている親は学びの場に出てこない」「届けたい人には届けられない」といった声である。

支援の対象は、子育てに関心のある親や学習を希望する親のみではない。しかし、子育てや家庭教育支援の現場では、積極的に支援を求めてくる親、学びや交流の機会を求めてくる親ばかりではない。必要にも関わらず支援に巡りあえない親や、対人関係が苦手な地域の交流の場に参加したがる親も多数いることが現実である。

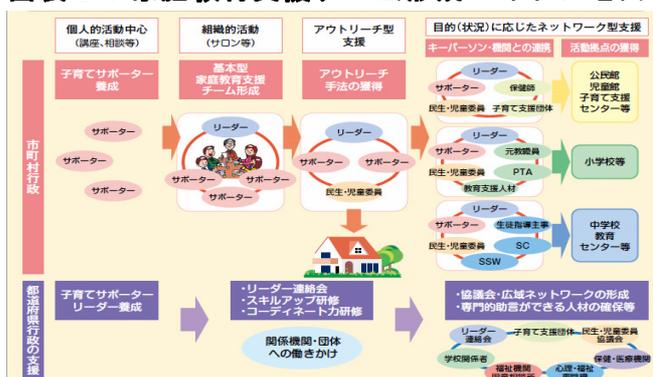
手の届きにくい親を含め、一人でも多くの親に「親プロ」を届けていくため、様々な機会を捉えた講座の実施やそのための「場」の開拓を行ったり、地域の多様な親と日ごろから人間関係を構築したりして、草の根レベルでの働きかけが行われている一方で、「学習機会の提供」を基本とする「親プロ」の活動は、「本当に困難な家庭には届かない」という“限界”を抱えているともいえる。

平成20年7月に閣議決定された教育振興基本計画では、「子育てに関する学習機会の情報提供、相談などの家庭教育に関する総合的な取組を関係機関が連携して行えるように促す。こうした取組の成果をすべての市町村に周知し、共有すること等を通じて、広く全国の市町村で専門家がチームを構成して支援するなど、身近な地域におけるきめ細かな家庭教育支援の取組が実施されるよう促す。」と示されている。また、平成24年3月に出された「家庭教育支援の推進に関する検討委員会報告書『つながりが創る豊かな家庭教育』」では、「届ける支援と福祉等との連携」として、「課題を抱えた家庭の孤立化は、課題の深刻化につながります。家庭教育を行うことが困難になっている孤立しがちな家庭や親へ支援を届ける取組（アウトリーチ）を推進していくことが課題です。」と述べられ、さらに、「支援のネットワークを広げる」として、「家庭の抱える複雑な課題に対応していくためには、身近な人材による支援にとどまらず、必要なときには、専門家や専門機関・団体等による支援につないでいく仕組みをつくる必要があります。このためには、家庭教育の支援の取組を、学校や地域における、NPO等による様々な教育支援活動の取組と連携しながら進めていくとともに、教育分野の取組と保健福祉分野の取組の連携・協力を図る仕組みづくりが重要です」と提言されている。困難な課題を持つ家庭、つながりにくい家庭に支援をつなげていく方策として、「アウトリーチ型」の届ける支援や「支援のネットワークを広げる」仕組みづくりが、国においても模索されているところである。

広島県の例では、尾道市の家庭教育支援チーム「親ちから」が、学校や保育所・幼稚園、地区の青少年健全育成連絡協議会等、地域の様々な関係機関と連携・協力しながら、家庭教育に関する情報提供や、家庭教育講座の企画運営等を行っている。また、県教育委員会では「学力向上総合対策事業」の一環として、家庭の学習環境に課題のある児童生徒の学力向上を図るため、保護者に直接あるいは関係機関を通じて働きかけを行う、家庭教育支援アドバイザーを6市町に配置されている。

図表9は、「家庭教育支援チーム形成へのプロセス」として、その取組モデルが図表化され示されたものである。様々な主体が連携・協働しながら支援の取組を行っていくことで、豊かな「家庭教育」が実現していくイメージが抱かれる。

図表9：家庭教育支援チーム形成へのプロセス



出典「家庭教育支援の推進に関する検討委員会報告書『つながりが創る豊かな家庭教育』」

「第6期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」(平成23年6月発足)では、「今後、社会教育行政は、地域住民同士が学びあい、教えあう相互学習等が活発に行われるよう環境を醸成する役割を一層果たしていくことが必要」であり、『このため、今こそ、従来の『自前主義』から脱却し、社会教育施設間の連携の強化のみならず、首長部局・大学等・民間団体等と連携して、地域住民も一体となって協働して、『ひらく・つながる・むすぶ』といった機能を様々な領域で発揮する、『社会教育行政の再構築』(ネットワーク型行政の推進)を実施していくことが必要」であると述べられている。

これからの「家庭教育支援」において、他主体との連携・協働は、無視できない「キーワード」、課題解決の「鍵」となるものと考えられる。

他主体との連携を進めていくうえでは、「うちではここまでしかできない」という“限界”を明らかにして全てを抱え込まないこと、また、自分たちの支援活動が、支援体制全体のどこに位置づいているのかポジショニングを明らかにすることが、まず必要である。また、行政が行うべきことと、民間(団体や住民)に託すことの明確化という視点も必要である。

「親プロ」の果たす役割と限界を明らかにすることにより、その限界を超えて、様々な主体と連携・協働し、縦軸(誕生から自立までの全ての発達段階において)、横軸(多様化するすべての子育て家庭において)、ともに切れ目のない支援を届けるための仕組みづくりが目指される。

### （３）持続可能な社会の実現に向けて

アメリカの政治家学者であるロバート・D・パットナムは、著書『孤独なボウリング』の中で、「ソーシャル・キャピタルが示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互報性と信頼性の規範である」と述べている。一般的には「社会資本」や「社会関係資本」などと訳される、この「ソーシャル・キャピタル」という概念は、社会・地域における人々の結びつき、またそこから生まれる信頼関係や「おたがいさま」といった言葉で表現される規範そのものを社会の資本とする考え方として、近年、地域づくり等に関する分野を中心として注目されてきている。

「第6期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」においても、「絆づくり・地域づくりに向けた体制づくり」として、「地域住民が、他の地域住民や関係者・関係団体と交流やつながりを持つことになる。こうした中で、『絆』・『ネットワーク』・『規範』・『信頼』といった、社会・個人の繁栄にとって重要な『社会関係資本』（ソーシャル・キャピタル）が構築されることが期待される。そして、この社会関係資本の構築を円滑に進めるためには、各地域において、多様な考え方を有する地域住民・関係団体等の調整役となるコーディネーターや地域住民等の意欲・力を引き出すファシリテーターといった人材の育成・確保、地域住民や関係団体等が集う場の確保、地域住民同士や関係団体等をつなぐネットワークの構築といった体制づくりが求められる」と述べられている。

これまでに考察してきた家庭や地域の教育力向上に果たす「親プロ」ファシリテーターの役割は、まさしくこの「ソーシャル・キャピタル」創出実現の可能性を持っているといえる。「親プロ」が、ファシリテーター自身より主体的な活動となってだけでなく、その活動を通じて培った経験やノウハウをもとに、ファシリテーター同士のネットワークグループが、「親プロ」の枠組みを超えて、様々な主体とつながり、連携・協働しながら、家庭教育支援を担うNPO団体等として自立・成長していく姿が目指される。このような連携・協働のネットワークは、いわゆる「ソーシャル・キャピタル」の創出につながるであろう。

そして、住民と行政との協働により、「親プロ」を核とした新しい家庭教育支援、親子の育ちを応援する仕組みが構築できれば、この取組は、子どもを安心して産み喜びを感じながら育てられる社会、すなわち次世代を育成する持続可能な社会の実現につながるものとする。 「親プロ」の持続可能な取組が、持続可能な社会そのものを実現していく可能性が展望される。

### 【参考・引用文献】

- ①家庭教育支援の推進に関する検討委員会「つながりが創る豊かな家庭教育～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～」 2012年3月
- ②文部科学省委託調査「家庭教育の活性化支援等に関する特別調査研究」（平成20年度）
- ③広島県教育委員会「教育モニターアンケート」（平成23年度第2回）
- ④堀公俊，加留部貴行『教育研修ファシリテーター』日本経済新聞出版社，2010年
- ⑤中野民夫ほか『ファシリテーション 実践から学ぶスキルとところ』岩波書店，2009年
- ⑥（財）ひょうご震災記念21世紀研究機構 研究調査本部共生社会づくり政策 研究群「親学び応援施策のあり方報告書」2010年3月
- ⑦中央教育審議会生涯学習分科会「第6期中央教育審議会生涯学習分科会における議論の整理」2013年1月
- ⑧大日向雅美監修『子どもを愛せなくなる母親の心がわかる本』講談社，2007年
- ⑨村田和子ほか「地域の子育て支援力の形成と強化に関する検討」日本社会教育学会第58回大会（於日本女子大学）自由研究発表資料，2011年
- ⑩財団法人 日本システム開発研究所「平成20年度 家庭教育の活性化支援等 に関する特別調査研究 報告書」2009年3月
- ⑪社会教育実践研究センター「平成19年度『家庭教育支援に係る地域の教育力の活性化に関する調査研究報告書』2010年4月
- ⑫R・D・パットナム著，柴内康文訳「孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房，2006年